論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（心理学）	氏名	太田 美里
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

社会活動を行う犯罪被害者遺族の
レジリエンスと意味づけに関する研究

論文審査担当者

主　　査　　教授　　岡本祐子
審査委員　　教授　　服巻　豊
審査委員　　教授　　石田　弓

〔論文審査の要旨〕

犯罪被害者遺族（以下，遺族）は,心的外傷後ストレス障害(Post-Traumatic Stress Disorder，以下，PTSD）等の精神疾患に罹患するリスクが高く,遺族に対する心的援助の質を向上させることは重要な課題である。しかし遺族の臨床心理学的研究は,PTSD 等，ネガティブな側面に着目した研究が多く,特に本邦において遺族に対する臨床心理学的研究は乏しいのが現状である。そこで本研究では,「レジリエンスにおける心的外傷後成長(Post Traumatic Growth，以下,PTG)生成モデル」を作成し，PTG に対する環境要因の影響力や機能を検討した。特に，① PTG に対し個人要因の影響性を統制しても,環境要因が影響を及ぼすのか，環境要因と個人要因,認知的対処,および PTG にどのような関連があるのかを検討する，②社会活動を行う遺族を対象に,レジリエンスの個人と環境の相互作用から成る回復プロセスについて,意味づけを主軸とした分析を行う，③活動を終えようとする遺族の心的変容プロセスを分析することを目的とした。

本論文は，以下のように構成されている。

第１章「本研究の背景と目的」では，第１節において,遺族に着目する意義を述べた。第２節では,レジリエンスに関する先行研究を展望し,レジリエンス概念には「特性」および「プロセス」としてのとらえ方があることを整理し,遺族を検討する上でのレジリエンス研究の課題を明確化した。第３節,第４節では，特に「意味づけ」および「社会活動を行う遺族」へ着目することの意義を示した。これらを踏まえて，第５節では,本研究の目的を述べた。

第２章「心的外傷後成長（PTG）に対するレジリエンスの個人要因と環境要因の関連」(研究1)では，大学生を対象に，①PTGに対する個人要因(資質的レジリエンス要因，獲得的レジリエンス要因)の影響性を統制しても，環境要因(評価的サポート，情報・道具的サポート，情緒・所属的サポート)が影響を及ぼすのか，②環境要因と個人要因，認知的対処（同化，調節），およびPTGの関連を検討した。その結果，PTGに対し，環境要因は個人要因の程度に関わらず影響を与える重要な要因であり，その種類によって意味づけに与える機能が異なることが示され，環境要因の影響を考慮してレジリエンスを検討していく必要性が示唆された。

第３章「社会活動を行う犯罪被害者遺族のレジリエンスの検討」(研究 2)は，第１節「意味づけを主軸とした犯罪被害者遺族の回復プロセス」(研究 2-1)，および第２節「活動を終えよ

うとする犯罪被害者遺族の心的変容プロセス」(研究 2-2)からなる。研究 2-1 では，社会活動を行っている 40 代～70 代の遺族 14 名を対象に,PTSDのスクリーニング尺度(IES-R)および個別の半構造化面接を実施し，遺族の犯罪被害後の回復プロセスを分析した。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下，M-GTA)による分析の結果，①遺族が他者への不信感と信頼感の間でゆれ動く循環プロセス，②故人と共に意味を模索する循環プロセス，③意味を生成し葛藤を抱えながら社会活動を行う遺族として生きる循環プロセスの 3 つの循環プロセスが重なり合うように生じていることが示された。遺族の個人要因については,他者への不信感と信頼感の狭間でもがく遺族にとって，人の温かさに目をむけるという関係性を取捨選択する力は，サポートを享受する上で重要であることが示された。一方，こうした力により，対人関係が局限化している可能性も推察された。回復に必要な環境要因については，欧米の遺族は，被害当初個人でグリーフの理解を深めていくが，本研究の遺族は被害当初から他者と繋がりを維持しており，対人関係の被影響性が高いことが示された。遺族の回復プロセスについては，14 人中 9 名の遺族がIES-Rのカットオフ値を超えていたことから，活動を行っている遺族といえども強い苦しみを抱えていることが推察された。 研究 2-2 では，研究 2-1 の対象者のうち，活動を終えようとしている 3 名に引き続き縦断的な面接調査を行い，その心的変容プロセスを明らかにした。その結果,活動の開始から活動を終えようとするまでの遺族の連続的な心的変容プロセスは，①故人と共に活動を行うプロセス，②故人と共に個人としての生活を取り戻すプロセスの 2 つから成ることが示された。活動を終えることは遺族にとって，生涯発達的な危機となる可能性が高いが，事件で奪われた自己コントロール感を活動への達成感により取り戻すことが，遺族の回復に重要であると示唆された。

第 4 章 「総合考察」では，第 1 節で本研究の成果をまとめ，第 2 節において，本研究の限界および今後の課題について論じた。

本論文は，以下の 3 点で高く評価することができる。

1. レジリエンスの環境要因の影響力や機能を明確にした。
2. 社会活動を行う遺族の回復プロセスを精緻に分析することによって，個人と環境の相互作用を検討し，回復の複雑性や文脈性を加味した個人要因と環境要因の機能を明らかにした。これにより，臨床心理学領域におけるレジリエンス研究の有益性と方向性を示した。
3. 回復プロセスで生起する意味づけを検討し，社会活動を行う遺族の成長や苦悩を含めた回復の様相を明らかにすることによって，心理臨床的な支援の具体的な方向性を示した。

以上，審査の結果，本論文の著者は，博士(心理学)の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 31 年 2 月 12 日